

主の公現

第一朗読 イザヤ 60・1-6

第二朗読 エフェソ 3・2、3b、5-6

福音朗読 マタイ 2・1-12

2026.1.4 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは主の公現の祭日のごミサをお捧げしています。この主の公現の日にはいつも、福音書ではマタイの福音書におけるイエス様の誕生の時の次第が朗読されています。クリスマスの日に読まれるルカの福音書と共通のところもあるけど、だいぶ違うところもありますけども、それぞれ、実際に何が歴史的に起こったかというのを伝えたいというよりも、イエス様とは一体どういう方なのか、あるいはまた自分たちキリスト信者は一体どのような者なのかということ、その物語を通して表現したいということなんだとされています。

特に今日の福音では、お生まれになった救い主のところから東の方から謎の人物がやって来る。その人たちは、イスラエルの聖書が言うイスラエルの民ではない。つまり聖書が言うところの「神の民」ではない。でもその人たちが救い主に出会いたいと一所懸命やって来て、最終的に救い主に出会う。一方で、神の民、救い主を待ち望んで神殿で祭儀をずっと捧げ続けていて、そして聖書を通して神様に導かれているはずのイスラエルの民の人たち——ヘロデ王とか律法学者、祭司長、そしてエルサレムの人たち——が、その救い主がお生まれになったっていう知らせを聞いたら不安に思う。また、エルサレムからベトレヘムまでは十数キロしかにも関わらず行こうともしないし、どこでお生まれになったかっていうのを聖書を通して正確に知っているはずなのにそこに行こうともしないし、また今日の箇所が続く箇所では、ヘロデ王がお生まれになった幼子^{おさなご}は自分を脅やかす者だと思って亡き者にしようとする、とお話が続いていきます。

それは、ただそういうことがあったというよりも、後の^{のち}キリスト信者たち、最初の時代のキリスト教が経験していること、多くのイスラエルの民、ユダヤ人がイエス様

を救い主と受け入れないで、異邦人たちが多くその信仰の共同体に入ったっていう、マタイの福音書を最初に読んでいた、あるいはその伝承を伝えた人たちが経験していた、そういうことが表されていますけども、それは、昔の人が愚かだったとか、そういうようなことだけでは片付けられないわけです。

マタイの福音書をずっと読んでいけば、どうして祭司長や律法学者を代表とする神の民は救い主を認めなかったのかということ、そのテーマが出てきます。それは神様からお預かりしたものを自分のものとしたい、あるいは自分のものと勘違いして、神様にお返しすることを拒んだからだっていうのが、福音書の説明の仕方になります。ぶどう園を預かっている農夫たちが、収穫を受け取りに来た人たちをどんどん追い払っちゃう、あるいは殺しちゃうっていうたとえ話の中に出てくるわけです（マタイ 21・33-44 参照）。

つまり、イエス様が本当にその信仰っていうものの実りを受け取りに来たときに、でもそれは、信仰や神殿やまた聖書そのものは自分たちの権威や、他の民族と違って優れているんだっていうその自尊心——表面的なものですけども——を満足させる、あるいは自分たちの王や祭司長としてのシステムを通して自分たちの権威を保つって自分たちの道具なんだというふうに固執した、という姿がそこに見て取ることができるわけですけども、でもわたしたちもやっぱり同じように、信仰を通して言われているのは全てを神様からお預かりしている——命もそして出会う人々も自分がその時その時に果たす役割も、もちろんこの教会の建物とか教会そのものも——だけどもそれを自分のもの、自分に所属するものとして勘違いしてしまうっていうことは、ヘロデ王や祭司長たちだけではなくて、わたしたちにもあるということ意識する必要があるように思います。

そういう責任ある地位にはないんだと思うかもしれないけど、たとえば自分自身の命であり、他者の命でありっていうものを、自分のものとして考えてしまう。それが、簡単に言うならば執着っていうことになります。また人間関係も——親子であれ、友人関係であれ——自分の思い通りにコントロールしようとする、あるいは相手が自分が知らない世界の広がりに出会っていくっていうことを裏切りのように感じるっていうのは、自分のものとして、お預かりしてる関係を超えて自分のものにしようとするっていう執着です。この執着がいかにか破壊的な力を持つのか、自分のものを誰にも、

神様にも取られたくないって、それがこのヘロデオ王の姿の中に集約しているように思います。

わたしたちがそれぞれ、今一度神様との繋がりに立ち帰る、神様との関係、神様の領域を犯そうとするならば、この人間同士の関係も互いに歪んでしまうということをお願いしたいと思います。

そして最後に、今日救い主に出会ったこの東の方から来た人たちは、帰りは違う道を通って帰って行きました。もちろんそれは、ストーリーとしてはヘロデ王が待ち構えてるからってということなんだけど、でも違う道を通って帰って行きましたってというのは、いつもわたしたちの黙想の材料として語られます。つまり、イエス様に出会うということは、少しずつでもそれまでの生き方や考え方、価値の基準が変わるといことなんだ、と。今までの自分のあり方を全く変えないために、そしてそれを正当化し補完するために信仰があるのではない。そうではなく、逆に、わたしたちはイエス様に出会うことを通して少しずつ変えられて、神様の方に導かれていく。そこに心を開き続ける必要があるように思います。

主の公現ってというのは、神様が、救い主がみんなに示されたっていう——公現ってこの日にしか聞かない単語だと思いきけど——神様はすべての人に示されたっていうことを記念する祭日ですけども、もちろんそれは強制的に示されたんではなくて、出会おうとするならば、っていうのが付いてます。でも、絶えずその出会おうとする気持ちが起こるように呼びかけ続けてくださるのも神様ではあるわけですけども、わたしたちはその呼びかけに心を開く必要があるように思います。

今日、わたしたちがこの主の公現のごミサのお恵みを通して、一人ひとりが改めてイエス様に出会い直し、またその出会いを深めていくことを通して、神様とまた他の人とそして自分自身との関係を、よりふさわしく、実りをもたらすものに成長させていくことができますように、恵みを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>